魚津市埋蔵文化財調査報告第12集

富山県魚津市

遺跡分布調査概要II

1984

魚津市教育委員会

例　　言

1．本書は魚津市教育委員会が国庫補助金の交付を受けて実施した昭和58年度遺跡分布調査事業の概要報告書である。

2．調査は昭和58年７～９月，11・12月の２期にわたって実施した。

3．調査対象地区は，上中島・下中島地区と近年林道建設がさかんにおこなわれている松倉地区の南部である。松倉地区では尾根上の踏査を重点におこない，中世城郭遺構の発見に努めた。

4．調査の方法は踏査を原則とし，発掘調査はおこなっていない。しかし土木工事の現場等では立合い調査を随時おこなっている。今回所在が確認された遺跡の範囲はほとんど推定範囲である。遺物の散布状況や地形を考慮して推定したもので，正確な遺跡の範囲を把握するためには試掘調査を実施する必要がある。

5．調査は市教育委員会社会教育課麻柄一志がおこない，市文化財調査委員会の協力を得た。遺物の実測等の整理作業は金木万貴子がおこなった。

6．遺跡名は字名を基本とし，同一字の中に複数の遺跡が所在する場合はそれにⅠ・Ⅱ……を加えた。

7．調査から報告書作成にいたる過程で下記の方々から協力・助言を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。

高岡　徹，桜井隆夫，斎藤　隆，山本正敏，安念幹倫，富山県教育委員会，富山県埋蔵文化財センター

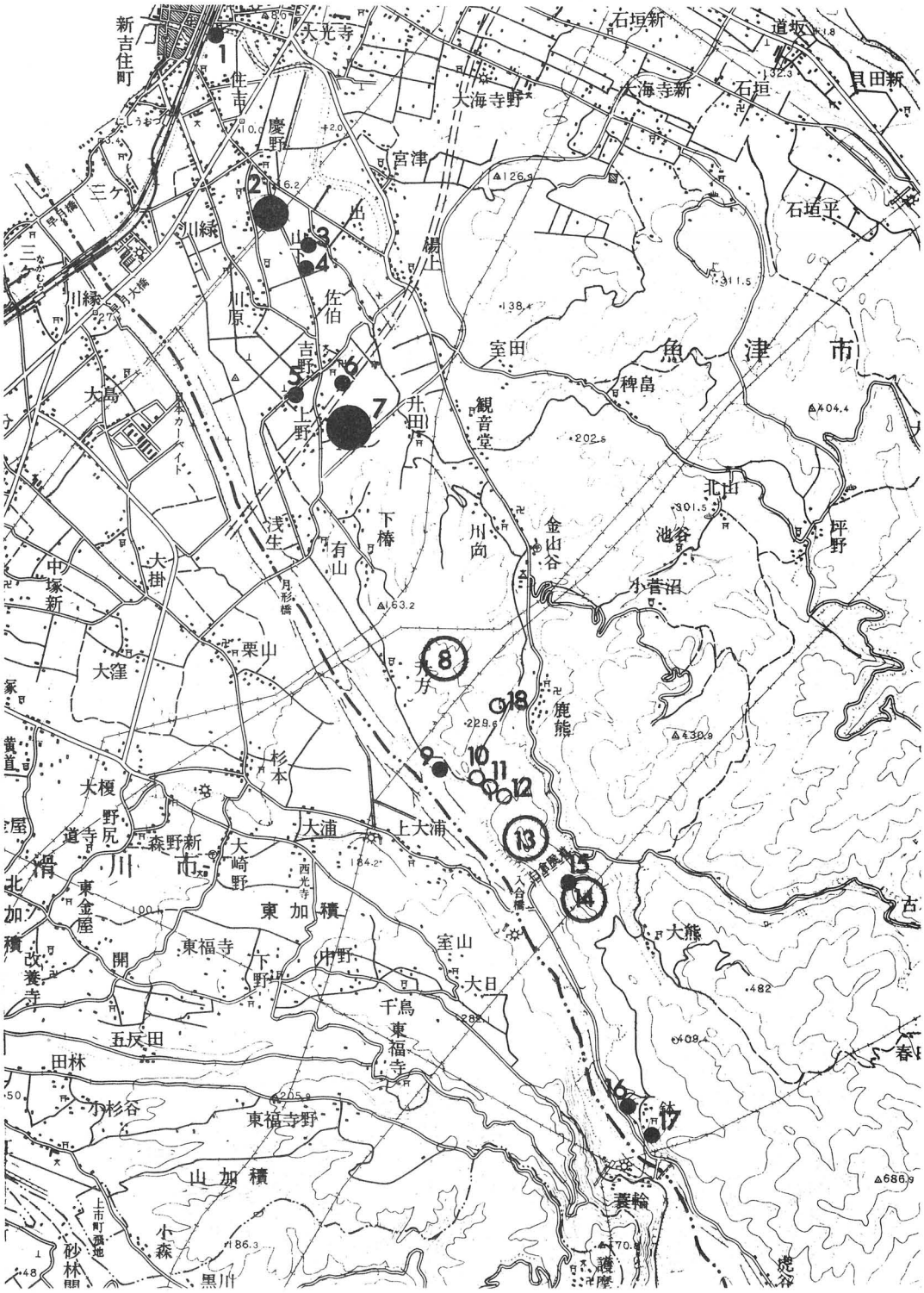
I はじめに

魚津市教育委員会では昭和57年度より国庫補助金の交付を受け，今後開発が予想される洪積台地を中心とする郊外の遺跡分布調査事業をおこなっている。富山県の中でも比較的開発の遅れていた新川地方も，昭和58年の北陸自動車道の開通とそれに伴う各道路網の整備によって今後の開発が予想される。また国道８号線バイパス，北陸新幹線の建設も予定されており，埋蔵文化財の保護のために遺跡分布調査が急務となっている。初年度の昭和57年度は国道８号線バイパス建設予定地周辺と天神台地を対象に分布調査をおこなった。

２年目の今年度は，早月川と角川に挟まれた中島地区とその南側に位置する山間部を対象とした。踏査した範囲は，沖積地，洪積台地，山間部に亘っている。沖積地は下中島地区，洪積台地は上中島地区，山間部は松倉地区にほぼ相当する。このうち洪積台地は，過去に大規模な圃場整備がおこなわれている。圃場整備の実施された地域はある程度の分布調査がおこなわれており，また試掘調査，記録保存のための発掘調査もおこなわれている。遺跡の分布状況もほぼ把握されていると思われる。これに対して沖積地・山間部では今までほとんど分布調査がおこなわれたことはなく，わずかに地元の山城研究グループの有志による中世城郭の調査がおこなわれているに

分布調査で確認された遺跡

番号	遺跡名	所存地	所属時代	立地	出土品	県地図番号
1	住吉遺跡	魚津市住吉	縄文	川底	石器	
2	佐伯遺跡	魚津市佐伯	縄文･弥生･平安	水田	土器・石器	
3	山下Ⅰ遺跡	魚津市佐伯	縄文	水田	土器・石器	
4	山下Ⅱ遺跡	魚津市佐伯	中世	水田	土器	
5	吉野中世墓	魚津市吉野	中世	水田	土器	
6	吉野遺跡	魚津市吉野	縄文	水田	土器・石器	1058
7	早月上野遺跡	魚津市上野	旧石器・縄文文	水田	土器・石器	1057
8	升方城跡	魚津市升方字城山	中世	山頂		1054
9	升方遺跡	魚津市升方	縄文	水田	土器・石器	1055
10	石の門	魚津市升方	中世	尾根上		
11	石の門南城郭遺構	魚津市升方	中世	尾根上		
12	土の門	魚津市升方	中世	尾根上		
13	水尾城跡	魚津市升方	中世	山頂		1056
14	水尾南城跡	魚津市大熊	中世	山頂	土器	
15	水尾南城北遺跡	魚津市大熊	縄文	尾根上	土器	
16	白倉小学校南遺跡	魚津市鉢	縄文	雑地	石器	
17	鉢遺跡	魚津市鉢字鉢造	縄文	水田	土器・石器	1047
18	春日社城郭遺構	魚津市鹿熊	中世	山腹		



第１図　分布調査全体図（1/5000）

すぎない。

沖積地では，水族館・レジャー施設が建設されており，行楽地として分後の開発が予想される。また，山間部では，林道建設がさかんにおこなわれているところから，中世城郭を対象とした分布調査をおこなう必要が生じている。

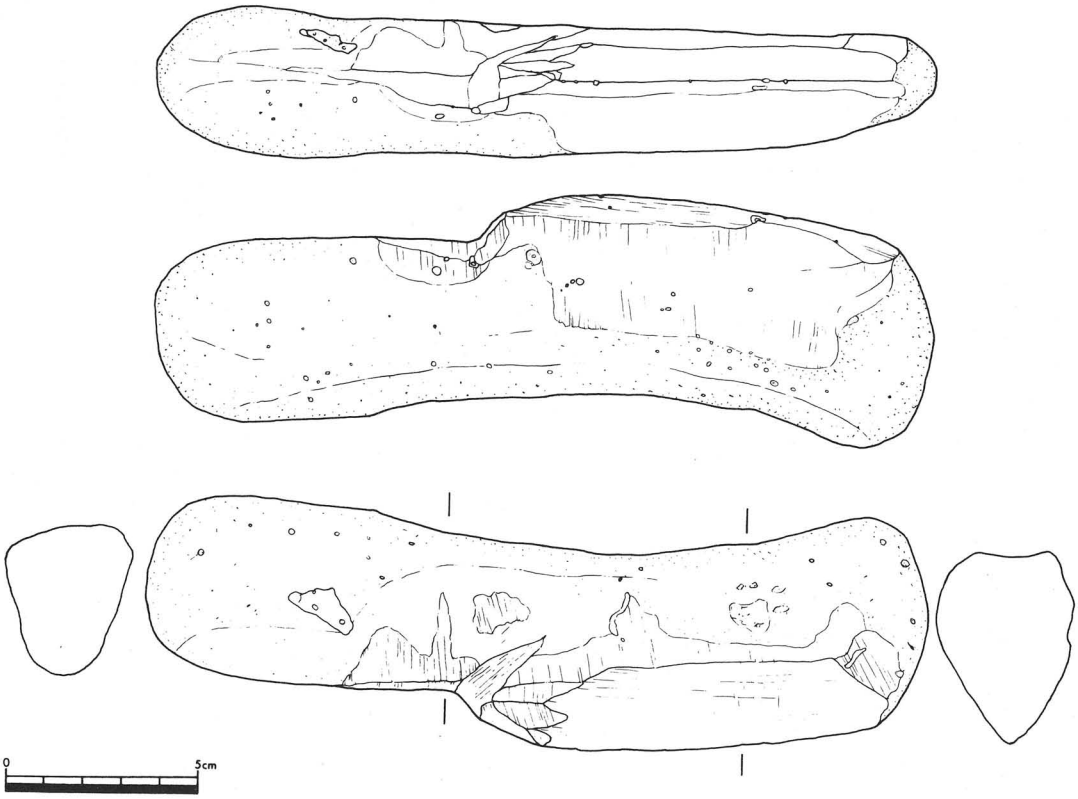
II　各遺跡の概要

1．住吉遺跡（第1図1）

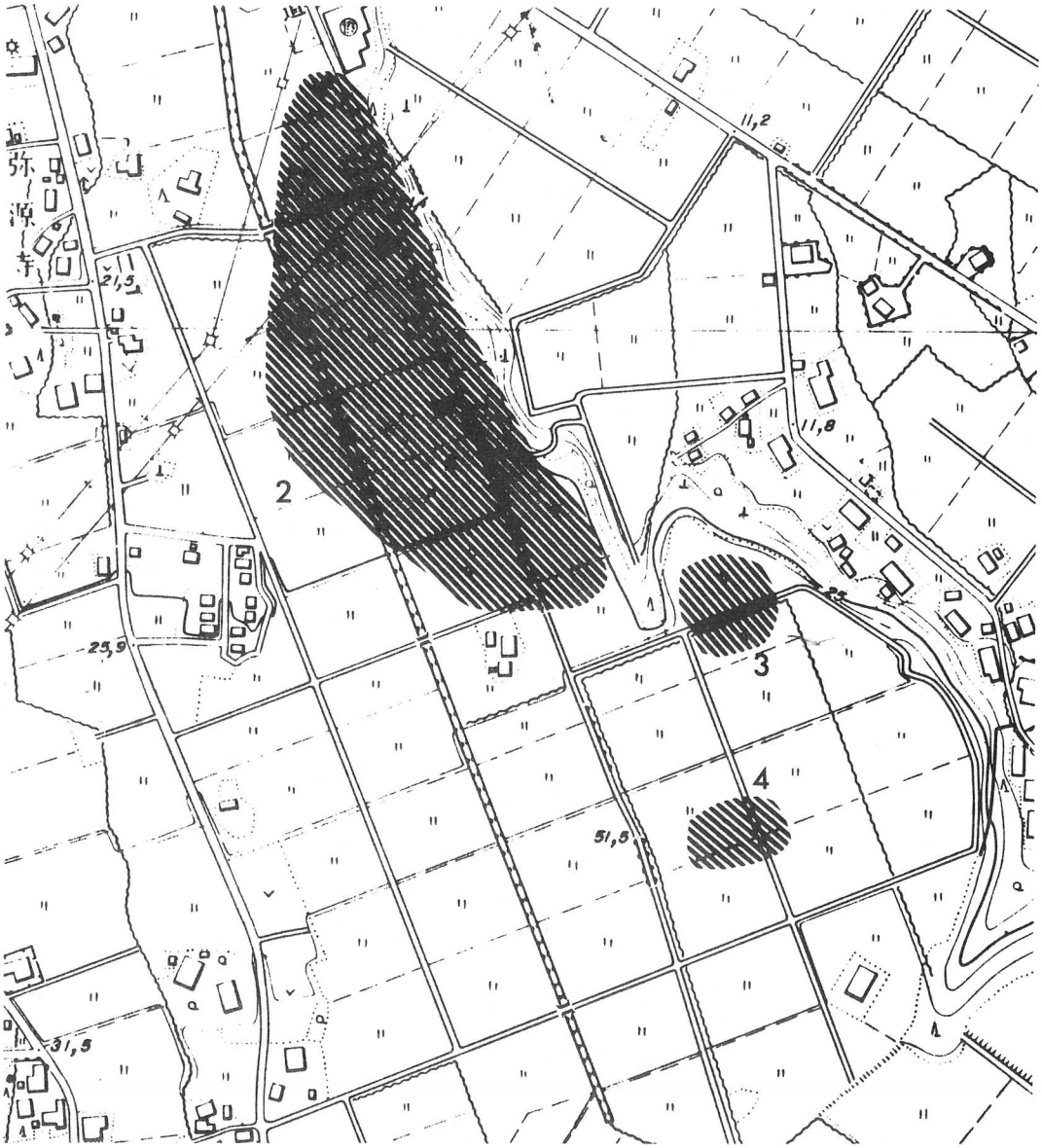
角川の河口に近い沖積地に位置する。角川の改修工事現場より石刀が採集されている。出土状況より，角川の河底の土砂の中に埋れていた可能性が高いが，石器自体には転磨の痕跡はほとんどみられず，さほど移動しているとは思われない。ほかに土器等は採集できなかったので，所属時期は不明である。あまり例をみない形態である。

2．佐伯遺跡（第1図2）文献2，3，4，5

三次にわたる発掘調査が実施されているが，遺跡の大部分は圃場整備の実施された水田の下に保存されている。発掘調査では縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代の遺物が出土している。遺構とては弥生末～古墳時代初頭の竪穴住居跡と，奈良・平安時代の掘立柱建物が検出されている。該期の遺跡としては市内最大規模を誇る。



第2図　住吉遺跡採集石器



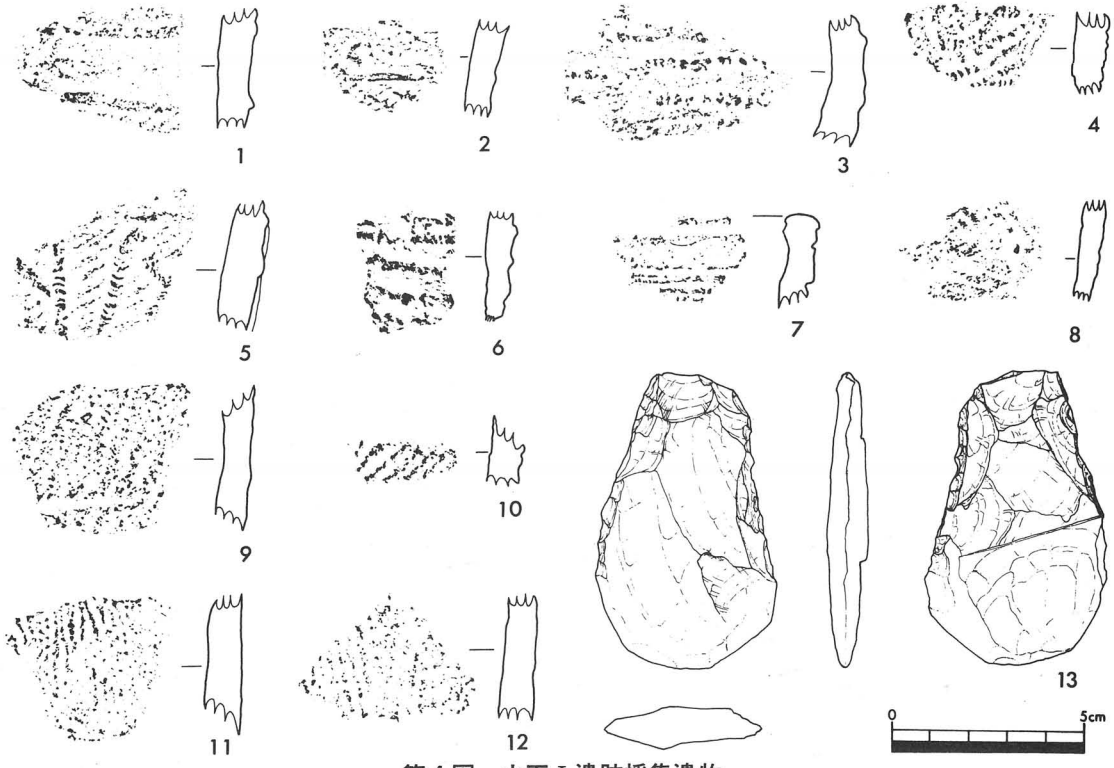
第３図　２．佐伯遺跡　３．山下Ⅰ遺跡　４．山下Ⅱ遺跡（1/5000）

３．山下Ⅰ遺跡（第１図３）

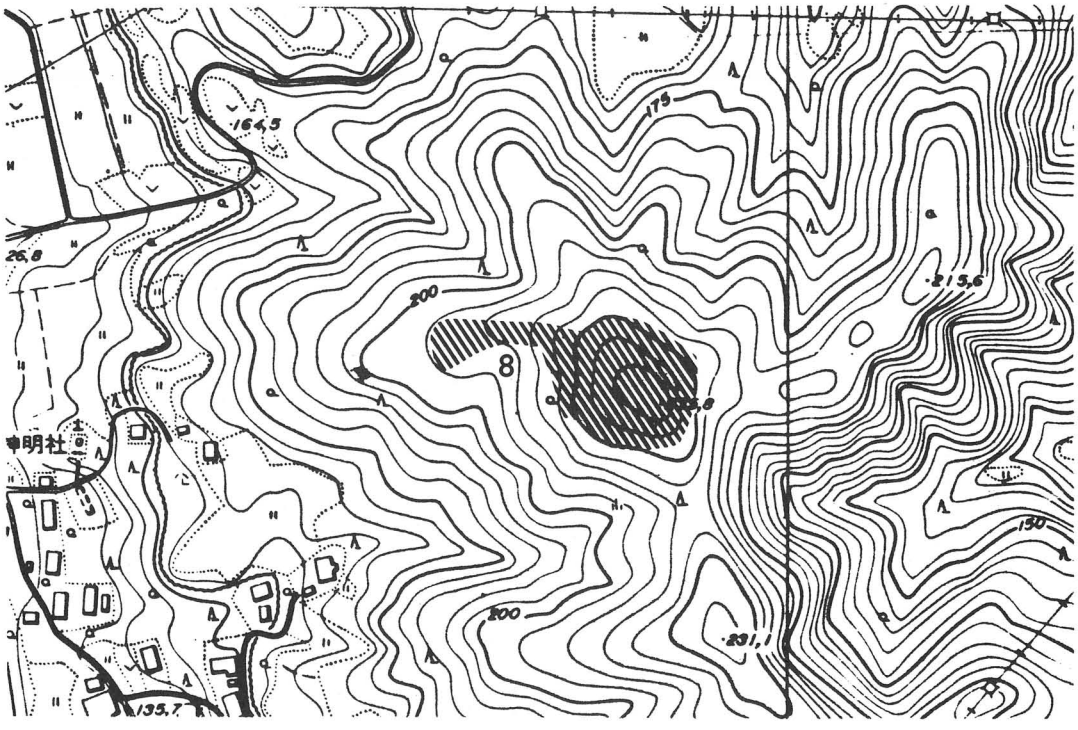
既に圃場整備で主体部は破壊されている。第４図に示したように縄文時代前期後葉の土器片・石器が採集されている。遺物はいずれも摩滅が著しい。第４図１－６は細い粘土紐の貼り付けがみられる。11・12は木目状撚糸文である。

４．山下Ⅱ遺跡（第１図４）

この遺跡も圃場整備によって破壊されている。中世の土器片がわずかに採集されている。



第4図　山下Ⅰ遺跡採集遺物



第5図　升　方　城　跡（1/5000）

第６図　升方城跡実測図（1/500）

5．吉野中世墓（第1図5）文献6参照

6．吉野遺跡（第1図6）文献9参照

7．早月上野遺跡（第1図7）文献7，8．9．10参照

8．升方城跡（第1図8）

今回測量調査を実施した。升方城は升方集落の東方通称城山の山頂に築かれている。山頂部にⅠ郭（標高241ｍ）を,一段下にこれを取りまく帯状のⅡ郭を配している。Ⅱ郭には井戸跡と伝えられる穴が三ケ所認められる。このうち二ケ所の穴には水が常時たまっている。Ⅰ郭は二つの出入口付近，Ⅱ郭は東・南・西側に土塁がみられる。Ⅰ郭・Ⅱ郭の土塁の一部には石垣も認められる。

Ⅱ郭の下には郭が数ケ所存在するが，特に升方集落からの登り口側には，空掘・土塁を設けた堅固な郭を二ケ所置いている。また升方集落から最初の郭に下には，馬場と伝えられる平担地がある。今回の調査で採集された遺物はない。

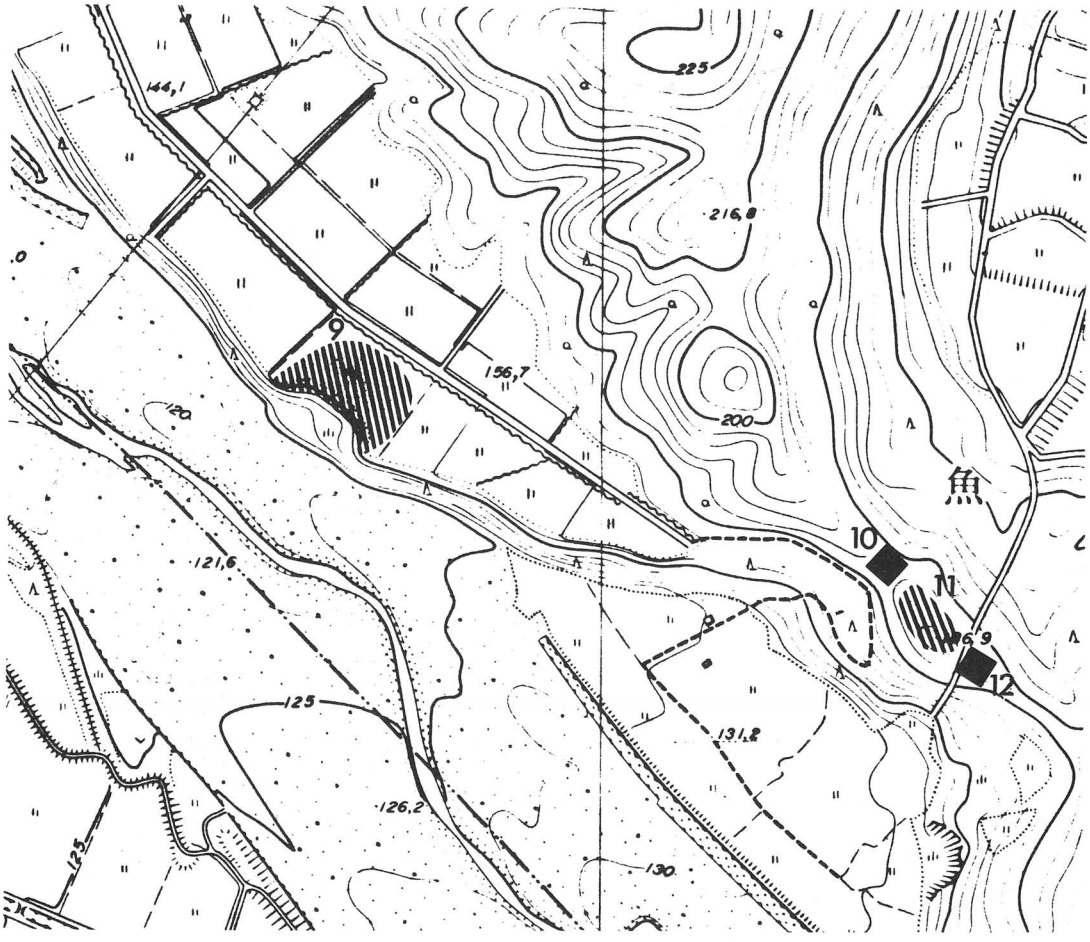
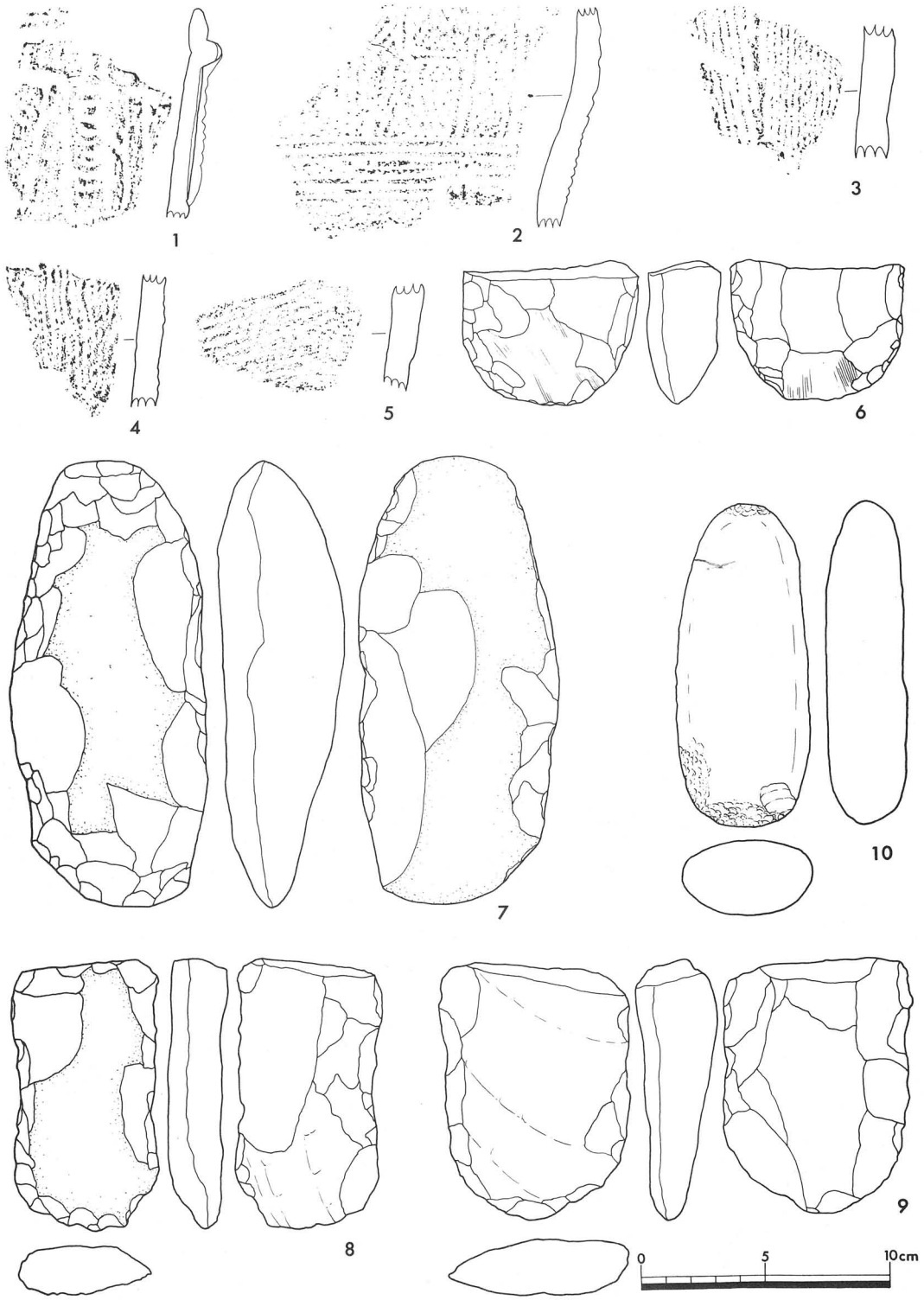


図7図　升方遺跡　石の門，石の門南城郭遺構，土の門



第8図　升方遺跡採集遺物

9．升方遺跡（第1図9）

早月川に面した河岸段丘上に位置する。1965年早月川に面した段丘崖が崩壊したことが契機で遺跡が発見された。その後，1970年代に圃場整備が実施されており，遺跡はほとんど壊滅状態であると伝えられていた。今回の分布調査では遺跡の中心部であると推定される崩壊した崖面で，土層の堆積状態を調査した（第9図上）。まず赤土混りの盛土がみられ，50～60cm下に黒褐色の遺物包含層がある。厚さは40～60cmを測る。遺物包含層はほとんど破壊されていると考えられていたが，崖に面してまだ残存していることが判明した。採集した遺物は縄文土器と石器で，縄文土器は中期初頭～前葉のものが多い。第8図3・4は木目状撚糸文である。石器は打製石斧（第8図7～9）が多く採集されている。そのほかに磨製石斧（6），敲石（10）などがあるが，石鏃は採集されていない。

10．石の門（第1図10）

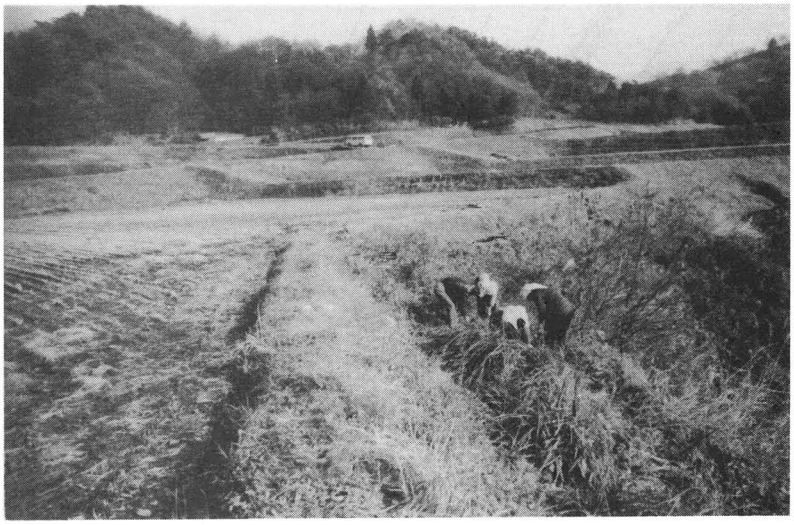
升方城跡と水尾城跡を結ぶ尾根上に「石の門」と呼ばれる石垣造りの門がある（第9図下）。松倉城を中心とする城郭遺構の一種と考えられている。

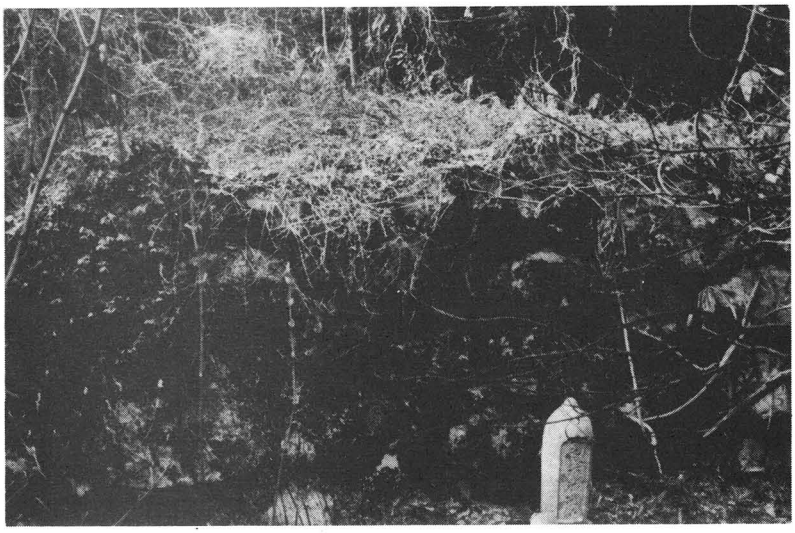
11．石の門南城郭遺構（第1図11）

石の門の南に続く尾根上に城郭遺構が存在する。削平地や人工的な段がみられる。石の門，この南の土の門と関連するものと考えられる。

12．土の門（第1図12）

石の門の南側に土の門と呼ばれる遺構が存在したらしいが，現在は林道建設のために消滅している。





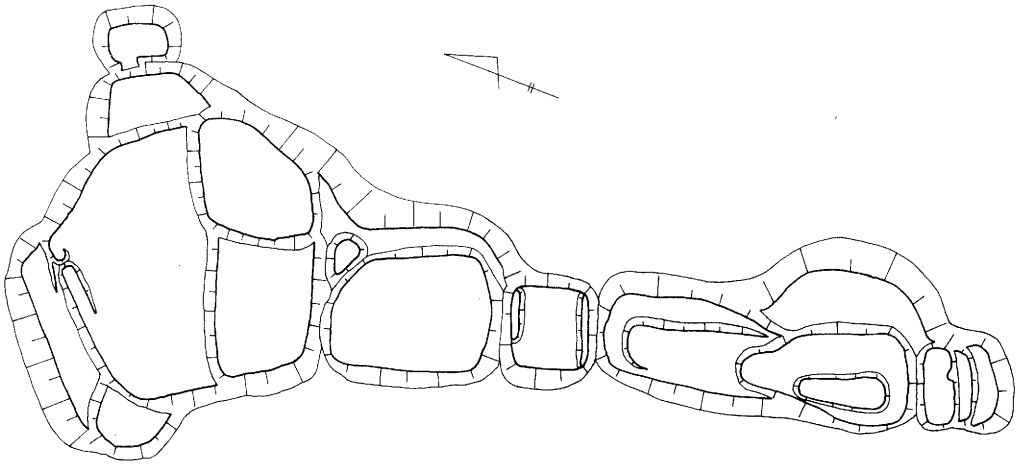
第9図　上・升方遺跡調査風景　下・石の門

第10図　13．水尾城跡　　14．水尾南城跡（1/5000）

13．水尾城跡（第１図13）

升方城跡・石の門の南に水尾山がある。この山頂部にある山城が『得田文書』にみられる水尾城であると考えられている。城は細長い尾根上にあり南北約250ｍを測る。城郭は５ケ所の空堀で区切られている。最も広いのは北に位置する郭でほぼ60ｍ四方である。この郭には北に土塁と門跡がみられる。北から３番目の郭には，南と北に土塁が設けられており，北側の土塁には石垣もみられる。

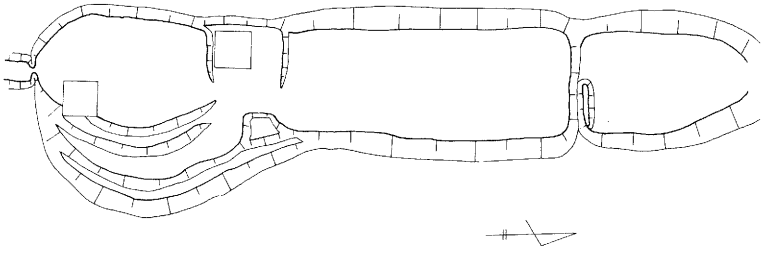
北から４番目の郭は水尾山の最頂部に位置し，内部は数段の削平地からなっている。南側には空堀が設けられており，その外に３段の削平地がみられる。この方面は水尾南城跡に続く尾根である。最も北側の郭は，石の門・升方城跡に向っており，土塁・門の外側には一段の削平地がみられる。この郭の東側は松倉城方面にあたるが，ここにも空堀が設けられており，空堀の外に削平地がみられる。



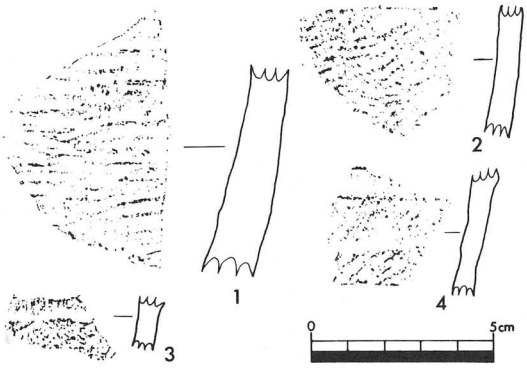
第11図　水尾城跡略測図（約1/2000）

14．水尾南城跡（第１図14）

水尾城跡からさらに南約500ｍの尾根上に城郭がある。『得田文書』の水尾南山要害と考えられる。城跡は尾根上のため南北に細長く，約200ｍを測る。城郭は大きく分けて３ケ所の郭から成り，最高所は南側の郭である。南側の郭は東に３段の帯郭がみられる。南側は空堀によって区切られており，堀の中央には土橋が存在する。中央の郭と北の郭の間にも空堀がみられ，北の郭には土塁が設けられている。北の郭の北側は，植林のため削られており，遺構は不明



第12図　水尾南城跡略測図（約1/2000）



第13図　1.水尾南城　2～3 水尾南城北遺跡

である。

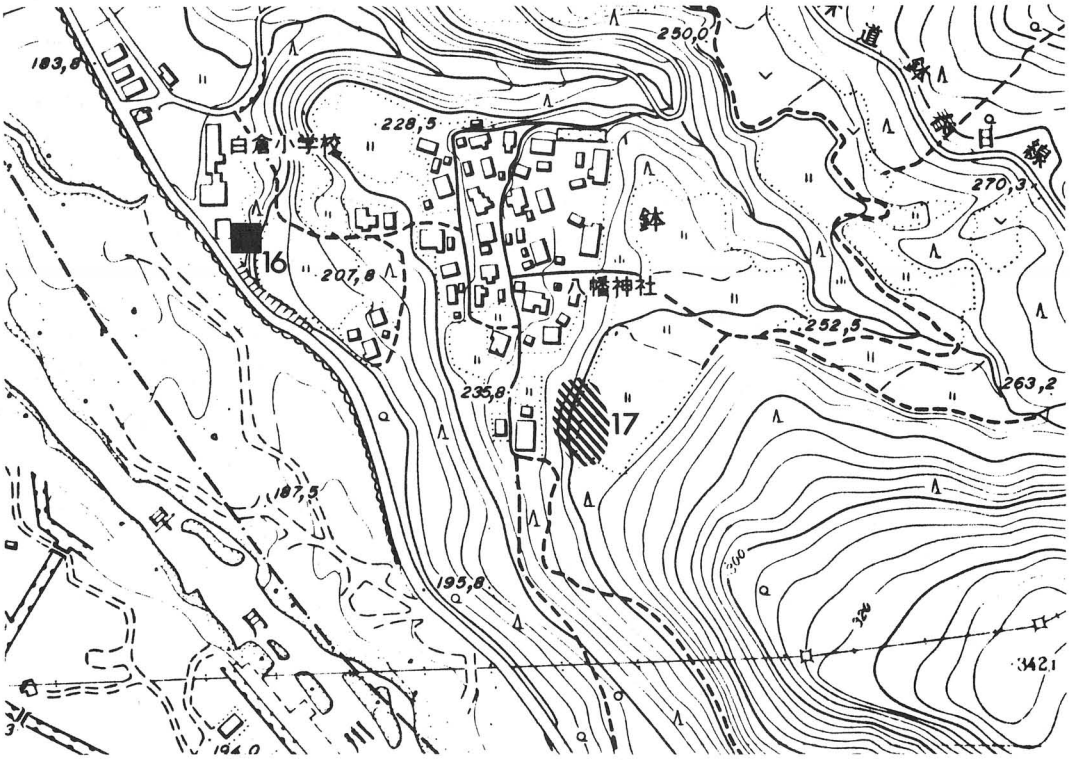
水尾南城跡は植林・送電線建設等で以前から一部が破壊されていたが，近年中央の郭に神社が建設された。この神社建設では郭の一部をブルドーザーで削平し，資材運搬のために中央の郭に搬入道路が取り付けられた。このために城跡東側を中心に大きく破壊され，削平地には土器片がみられる。第13図１がそれで，珠洲焼の甕の破片である。

15．水尾南城北遺跡（第１図15）

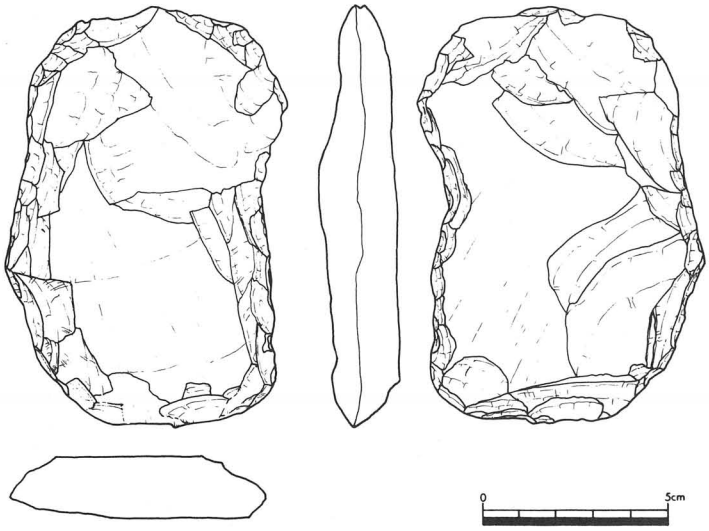
水尾南城の北の郭の外側も，水尾南城跡の神社建設に伴う工事によってブルドーザーがはいっている。ここから数点の土器片が採集できた（第13図２～４）。いずれも縄文土器の破片である。３・４は細かい縄文を施し，上部は無文である。同一個体である。いずれも器厚は薄く，焼成はよい。

16．白倉小学校南遺跡（第１図16）

白倉小学校の南側より一点の打製石斧が採集された。採集地点は段丘下で畑地である。他にま



第14図　16．白倉小学校南遺跡　17．鉢遺跡（1/5000）



第15図　白倉小学校南遺跡採集打斧

ったく遺物が採集されていない。打製石斧はそれほど磨滅もしておらず，河川によって運ばれたとも考えられない。近くに鉢遺跡も存在するところから，縄文時代の作業地であった可能性が高い。こうした打製石斧の単独出土例は，魚津市内で数例存在しており，いずれも大規模な縄文中期の遺跡の近くである。

縄文時代の植物採集の領域をこうした打製石斧のみの出土地から推定することができる。今まで遺跡として認められていない地点でのこうした生産用具の単独出土は，注意すれば今後も発見例が増えると考えられる。

17．鉢遺跡（第１図17）

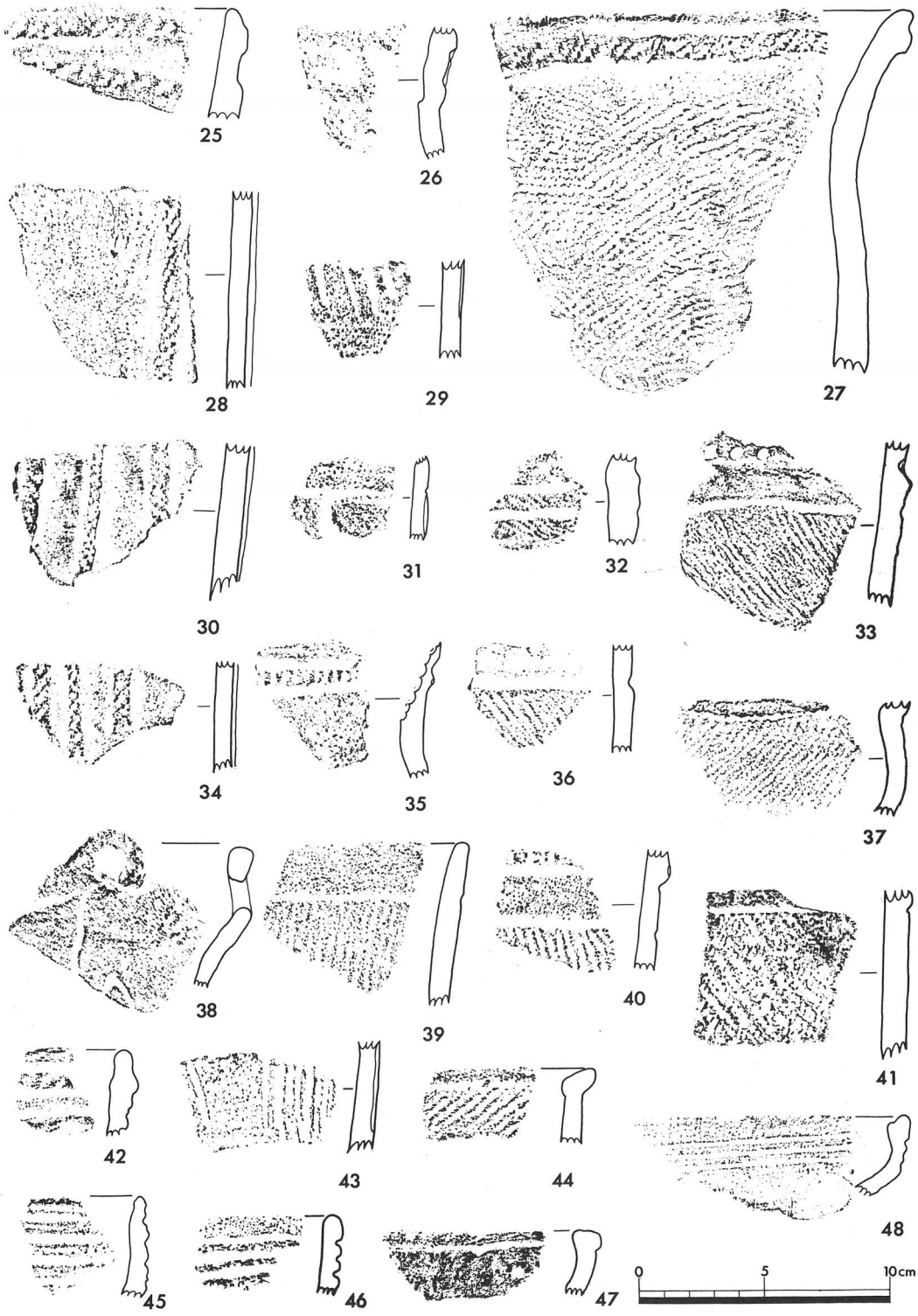
早月川の右岸の奥に鉢の集落がある。この集落は低位段丘上に立地している。鉢集落の東側には中位段丘が存在しており，段丘上は水田となっている。この中位段丘の水田の段丘崖に面した一体が鉢遺跡である。鉢遺跡は約20×30ｍの範囲から遺物を出土しているが，水田となっているため実際の範囲はやや広いものと思われる。現在では段丘崖に面した僅かな面積から遺物が採集されるだけで，水田からは採集できない。

採集遺物は，縄文土器・土製品・石器である。縄文土器は中期前葉（第16図１）のものが僅かにあるが，残りは中期中葉から後葉のものが大半である。また後期の土器も一部含まれている（第17図48）。土器からは鉢遺跡は縄文中期後葉が中心といえる。土製品としては有孔球状土製品（第18図67）があるが，後・晩期に属するものであろう。

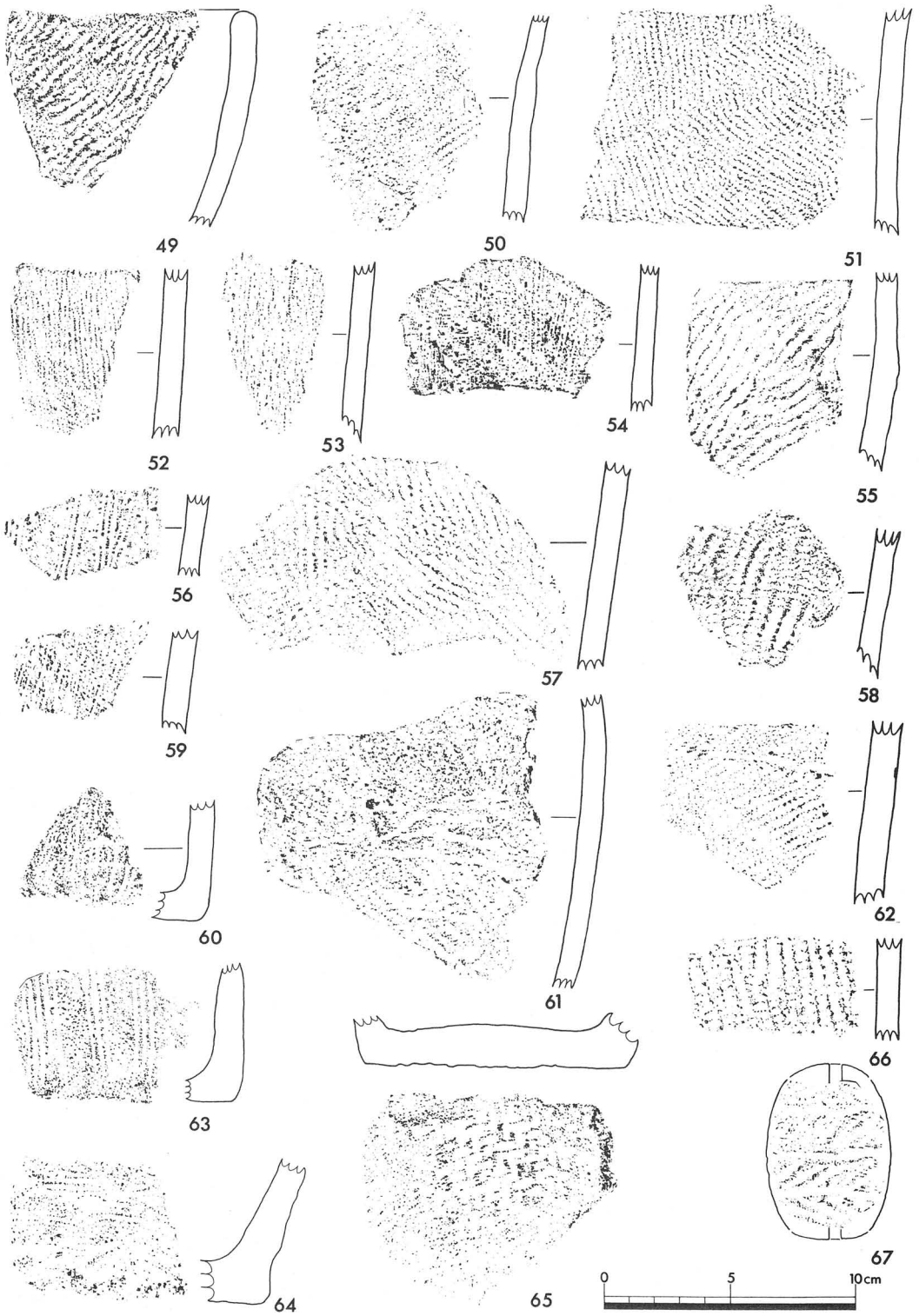
石器は多量に採集されている。打製石斧が14点と最も多く，また磨製石斧９点がある。磨製石斧に未製品が含まれる。石器としてはこのほかに敲石・礫器があるが，剥片石器は採集されていない。打製石斧は完形品が多く，第19図２のように刃部が使用によって磨滅しているものが存在する。

打製石斧は北陸では縄文中期前葉から急激に増加し，それまで中心的な石器だった石鏃にとってかわる。その後北陸では遺跡による個性はみとめられるが，石器組成の中核が打製石斧になっている。その点からは鉢遺跡の石器組成はかなり片寄ってはいるが，北陸の縄文中期～晩期の一般的傾向を表わしている。縄文時代中期後葉ではこのような山間部においても打製石斧を中心とする生業体系が確立していたといえよう。

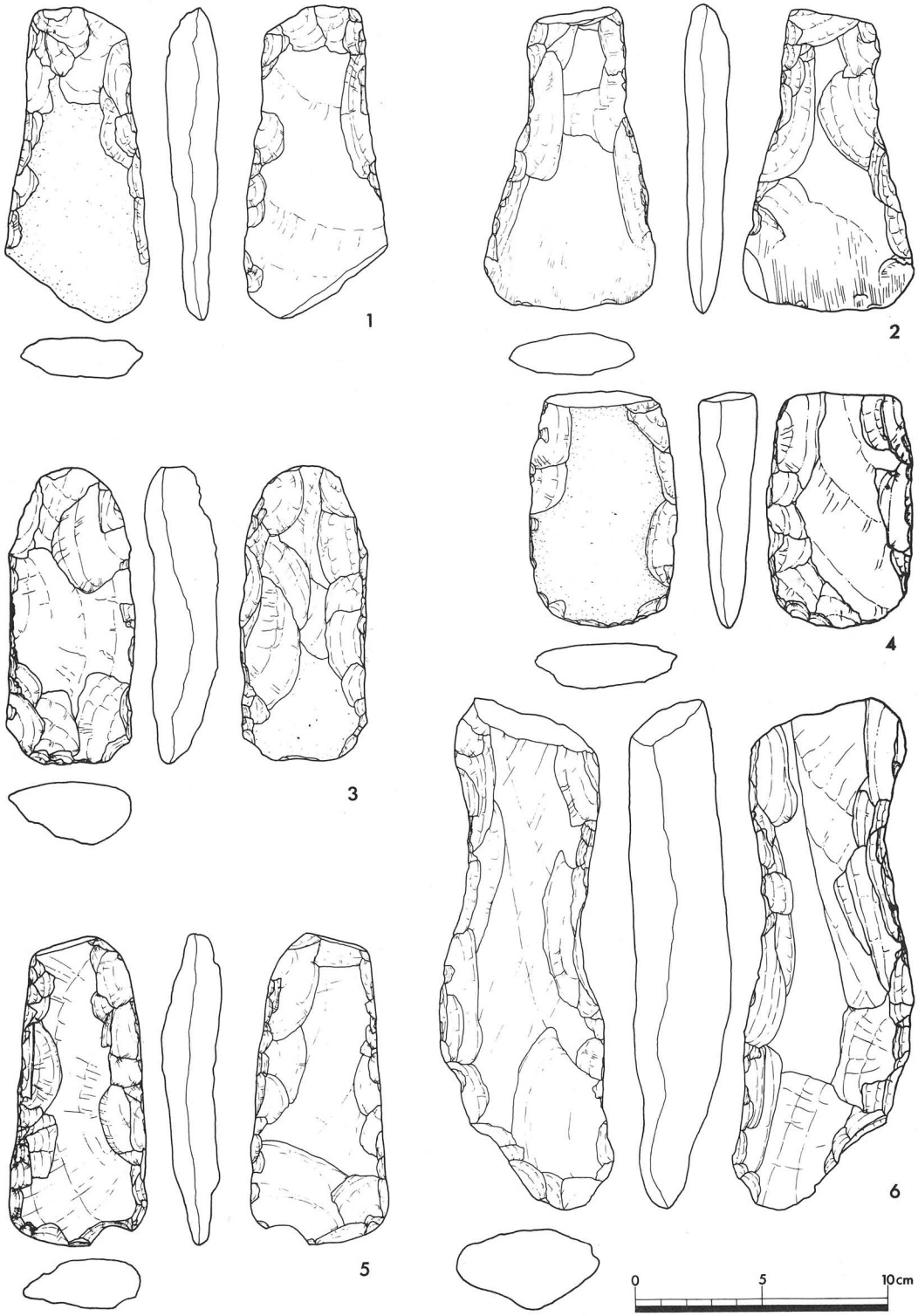
第16図　鉢遺跡採集土器



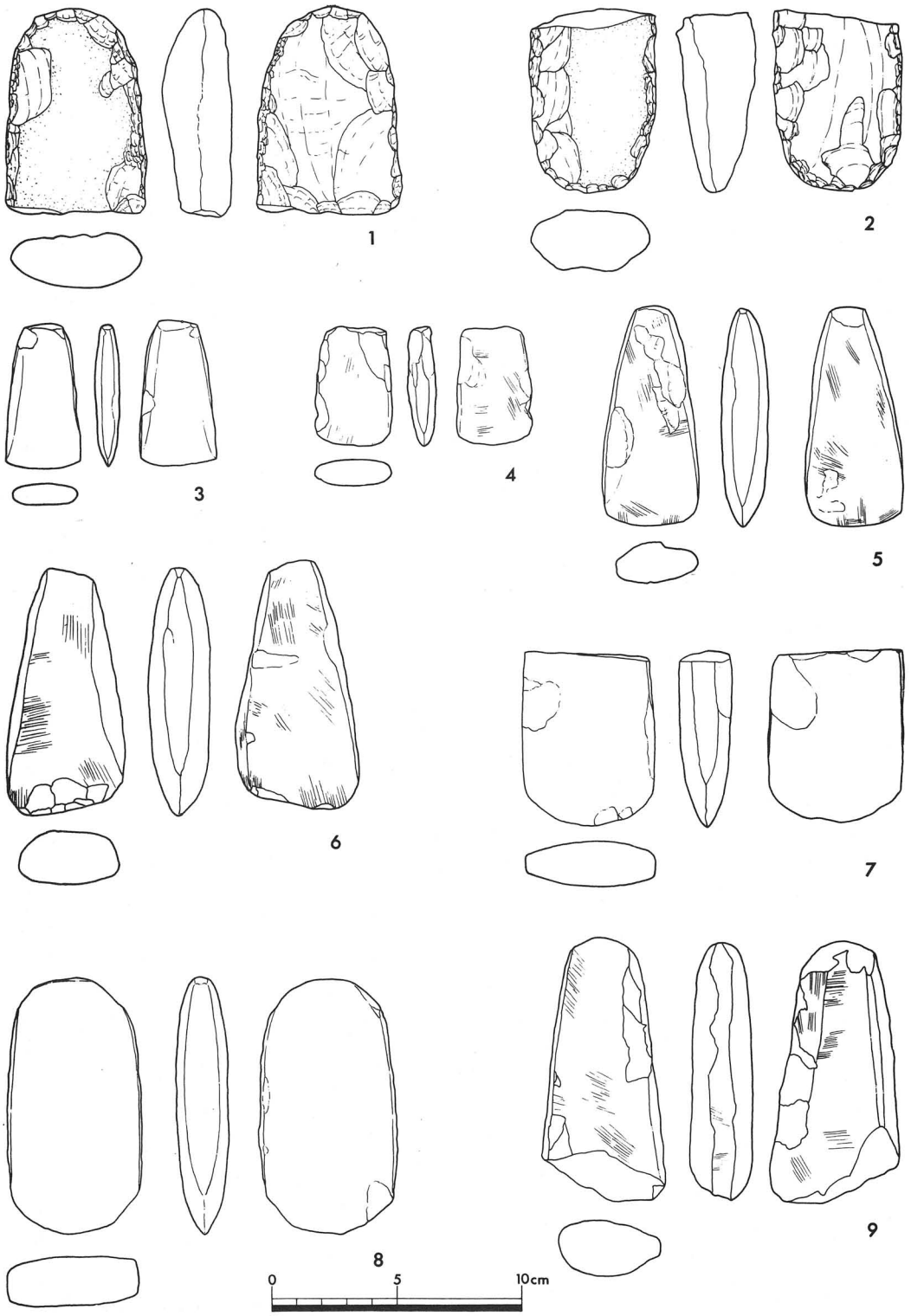
第17図　鉢遺跡採集土器



第18図　鉢遺跡採集土器



第19図　鉢遺跡出土打製石斧



第20図　鉢遺跡出土　打製石斧・磨製石斧

文　　献

1．魚津市教育委員会　1983　『富山県魚津市遺跡分布調査概要Ⅰ』
2．山本正敏　1982　「考古」『魚津市史』史料編
3．富山県教育委員会　1979　『富山県魚津市佐伯遺跡発掘調査概要』
4．富山県教育委員会　1979　『富山県圃場整備関連事業埋蔵文化財発掘調査概要』
5．魚津市教育委員会　1981　『富山県魚津市佐伯遺跡』
6．魚津市教育委員会　1981　『富山県魚津市印田近世墓』
7．富山県教育委員会　1975　『富山県魚津市早月上野遺跡第１次緊急発掘調査概報』
8．富山県教育委員会　1976　『富山県魚津市早月上野遺跡第２次緊急発掘調査概報』
9．魚津市教育委員会　1982　『富山県魚津市早月上野遺跡』
10．魚津市教育委員会　1983　『富山県魚津市早月上野遺跡』

魚津市埋蔵文化財調査報告書第12集

富山県魚津市

遺跡分布調査概要Ⅱ

昭和59年３月31日発行

発行　魚津市教育委員会
〒937　魚津市釈迦堂1-10-1
印刷　小浜印刷